ディアラマスター

秋臣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ディアラマスター

【Ｎコード】
Ｎ７２４４Ｗ

【作者名】
秋臣

【あらすじ】
ディアラ、それは己の心の強さを力に還元するものであり、心を通わすことのできる精霊。
だか、それを扱うことのできるのはほんの一握りしかいなかった。
その一握りに入った幸運なジュートは王都からの命令でディアラの訓練校に通うことに。
個性豊かな学生たちと競い合う一方、世界を巻き込む波瀾万丈人生の始まりだった。

プロローグ　～言葉のない世界～（前書き）

最初からちょっと残酷です。

プロローグ　～言葉のない世界～

戦だ。
戦があったと思われるこの地はひどく荒れている。

空は厚い雲におおわれた深い灰の色。
乾いた風が砂を巻き上げ視界を悪くする。
辺りを見渡せば硝煙と建物が崩れた跡ばかり。
田畑や田んぼで育てられたものは跡形もなく消しとんだ。
ところどころ火の粉が舞っているのはこの地が人の手によって焼け払われたことが分かる。

そして、少し炭(すみ)で汚れた死体の山がとある青年の目の前にあった。

彼は赤く光沢のあるジャケットにズボン、巻きスカートの軍服を着ている。
赤いベルト、肩のライン、襟、ボタン、右腕のポケットには金の装飾品。
歩きやすい黒い膝下まであるブーツ。
両胸にポケットがあり左ポケットには炎のようなたてがみを持つ銀狼の紋。
腰には刀を下げ白い手袋をした左手で強く握っている。

黒く短い髪は砂が絡みつきごわごわとしている。
下を向いたとき首筋から見える白い肌は軍服がよりいっそう浮きだたせた。
着痩せする体質なのか腰は細いが、身長は１７０ｃｍもなく低い。

１番目をひくのは顔をおおう鬼の面。
凄まじい形相である。

「ガルガディア」

面でつけているため、かすれたこもった声でそう呼べば彼の体から赤い粒子が飛び散った。
粒子は一ヶ所に集まりだし人の形を創りだす。

するとそこにはガルガディアという、肩より長い燃えるような赤い髪をひとつに束ね、ルビーより赤い目を持つもう１人の青年が現れた。
たれ目であるため顔つきは優しい印象を与える。
１９０ｃｍくらいで太陽に愛された薄い褐色の肌をもち、がっしりとした上半身にスラリとした長い足。
白いシャツに黒いスラックス。

その上に絹の黒いジャケット、ネクタイ、革の靴といった喪服を着ている。

『やるのか？』

優しいく低い音。
聞く者に安心感を与えるような大人の声音（こわね）が響いた。

「…俺にできるのはこれしかないと思うから……お願い、ガルガディア」
『…お前の頼みを断れるはずがないだろう？』

ガルガディア優しくさとすように彼の面をはずした。
そこにはまだ幼い顔立ちながらも切れ長の大人びた黒い目をした15歳くらいの少年がいた。
身長、声の低さ、出で立ちから青年だと見間違えていたのだ。

「ありがとう。」

ガルガディアはまた赤い粒子となり彼の体に溶け込んだ。
彼は体が熱くなったのを確認してからすぅっと息を吸った。

「立ち上がれ、炎柱」

面を右胸に押さえつけ先ほどとは打って変わりはっきりと凛とした口調で声にした。
体中の神経にガルガディアが流し込んだ力がいき渡り、右手をかざした。
すると、目の前にある死体の山から高さ１０ｍ横２０ｍ程の炎の円柱が勢いよく燃え上がり死体を焼いていった。
肉が焼ける独特な匂いが吐き気を催した。
彼は思わず顔をそむけようとしてぐっと堪える。

彼はただそれを見る。
燃え上がる炎の中、血を流すこともなく、黒く焼けた死体が消滅するまで眉間にシワを寄せてじっと見ている。
彼の行いは死者の魂に安らかにと祈りを捧げているのか、それともせめてもの罪滅ぼしのつもりか。

それは誰にもわからない。

プロローグ　～言葉のない世界～（後書き）

誤字、脱字ご指南よろしくお願いします。

プロローグ2　～夕日の嘆き～（前書き）

時間軸はこっちのが後。

プロローグ2　～夕日の嘆き～

「ただいまーって…部屋の隅(すみ)でなにしてんだよアズル。」

アズルは茶色に近い金の髪、農作業で焼けた肌、薄緑色の透き通るような目をした17歳くらいの男の子。
真面目そうな風貌をしている。
今は農作業の途中のため作業着を着ている。

「ジュート？いや、あの、なんでもねぇよ？」

ジュートもアズルと同じ様な見た目だ。
双子である。
ちなみにジュートの方が兄である。
ただ、前髪はアズルより短く身長も高く野性味溢れる風貌だ。

「ふ～ん。ん？なんだこれ？」
「あっ！こら、返せ馬鹿ジュート？」

アズルが隠していた高価そうな白い手紙にはこの国の国章、銀狼の印が押されていた。

「おいおい、国からって…お前なんか盗んじゃったりしちゃたわけ？」
「俺がんなことするわけねぇーだろ？」
「だよなー。んじゃ誰が……俺かよ…。」
「…見られる前に燃やして荷作りして逃げようかと思ってたのにっ？」
「お前ほんとテンパるとすげぇこと考えるよな…。」

ここはシェルダス国の最南端にあるカロットという村だ。
隣国とは冷戦状態が続いているため今はまだ大事には至らない。
例え戦(たたか)いが始まったとしてもまず1番最初に攻撃を受けるのは西側の方だと予測されている。
つまり国からの手紙が届くとすれば予測を反し最南端のカロットに危険が迫っていると思う訳だ。

「え～と、なになに～？」
「ううっ、荷作りしてくる…。」

ジュートはビリビリと無造作に封を破り手紙を読んだ。

おめでとうございます。

あなたは見事ディアラを扱う資格を手に入れました。
国の法に基(もと)ずき一人前のディアラマスターになるべくシェルダス国

首都シェルダス(王都)への入国が許可されました。

まずは完了手続きのため一度王都にお越し下さいませ。

その他地図、入国の仕方、持ち物、服装など細かく書きこまれていた。

「アズル〜、荷作り必要ねぇわ。」

「え？なんで？」

上の階でゴソゴソとしながらアズルは問うた。

ジュートはその辺に置いてあったカバンに水と食料だけ詰めた。

「俺が世界をかえてやる！」

「はぁ？」

「みやげはちゃんと買ってくるから」

「おい、ジュート！」

「んじゃー行ってくる？」

ジュートは早々とかけていった。

「こんっっの、馬鹿ジュートーーー？」

さて、ジュートは夕日を背に何をおもったのだろうか。

プロローグ2　～夕日の嘆き～（後書き）

次から本編？

出会いは必然

シェルダスの法のひとつにディアラに関する項目がある。

ひとつ、ディアラを扱いう者は王国直属の保護下に置かれる。

ひとつ、ディアラを扱う者はディアラを扱う訓練を行うため専門の学校に通うべし。

ひとつ、ディアラを扱う者の家族または保護者は国からの援助が得られる。

この項目がまるで未成年のこどもの待遇であるのはディアラを扱うことができるのは比較的こどもが多いためだ。
他にも学校を卒業してからのことなど多々あるがおいおい説明しよう。

ジュートはカロットを出てから公共の施設を使って王都に行こうとしていた。
王都に向かう列車は低賃金で乗ることができるため列車内はかなり混んでいる。
もう少し金を払えば小さいながらも個室車両に入れるが数が少ないため相席になることもある。
今回ジュートは個室車両に入ることにした。
もちろん忍び込んで。
あまりにも堂々と入るから駅員はきずかなかったのだ。

うーん、こっちも混んでんなー。
どっか空いてるとこねーかな。

ジュートはスタスタと通路を歩きながら両側にある個室の窓を覗く。
どこも家族連れが多くとても入ってはいけない。
しばらくすると1番後ろの左側の個室に自分と同い年くらいの男が座っていた。
トントンと2回窓を叩き扉を開いた。

「悪りぃ、相席いいか？」
「へ？えっあっ？…えっと、うん。どうぞ？」

ジュートは向かいの席に着いて相手の顔を見た。

茶色の髪にの黒い目か…。
きれいな顔してんなー。
カロットじゃ珍しい色の目だけど王都にはごろごろいんだろうな。
今じゃ髪も目も色を変えられるってアズルが言ってたな。
たくっ、親からもらっもんを何だと思っていやがる！
あぁ、髪と目か…。

「ありがとな。俺はジュートだ、ジュート・ローガ。短い間だけどよろしくな。」

「お、俺、エリオット・レイ・ロダン・グランフォード・アドピーティオ・シェルダス。こっちこそよろしくお願いします。」
「なげーなー。もうエリーでいいよ、エリーで。」
「えっ！やだよ、そんな女の子みたいな名前」
「はっはっはっ、いいじゃねぇか。ひと時の思い出ってやつよ。」

ジュートはエリオットの緊張を程よく解いてやり会話を進めていった。
幼いながらも強みのある目だ。

「なぁ、エリー。もしかしてエリーも王都か？」
「エリオットですってば。俺はリシャーナへ行くんだ。」
「うわっ、王都より遠いじゃねーか。何しに行くんだ？里帰りか？」
「えっと……仕事…かな。」
「仕事？その年でか？」
「え？」
「だって、お前どっかの貴族だろ？俺と年はそんな違わねぇし、まだまだ遊びたいざかりだし。」

ジュートの平民服とは違ってエリオットはお忍び貴族服といったかんじだ。
エリオットは少し困った顔をしている。

「え…えっと…。」
「やじゃねーの？」
「いやだけど…でも、結局誰かがやらなければいけないことだから…。」

「うーん…。だったら一緒にやればいいんじゃね？」

エリオットは心底不意をつかれた顔をしてふせめがちの目を上げた。

「だから、誰かと一緒にやればいやいや減少だろ。貴族のくせにそんなこともわかんねーのかよ。ぷー」

「なっ！君だって俺を貴族と分かってて無礼をはたらきすぎなんだよ！頭悪いのはそっちのほうじゃないか！」

「お前が貴族らしくないからいけねーんだよ、エリーちゃん。」

「だから、エリーじゃない。エリオットだってば？」

ぐ～。

「かわいく鳴るな～。やっぱエリーのがかわいいって。」

「…かわいさなんて求めてない。」

エリオットは頬を赤く染めながらはっきり言った。

ジュートはそんな顔を楽しみながらカバンからサンドイッチを取り出しエリオットにわけた。

「ほらよ。」

「わっ、美味しそう。いいんですか？」

「おう、だからんなキラキラした目で見んなって。」

「だってここの売店あんまりいいの売ってないし、リシャーナにで

もきっとお店くらいあるからそこで食べればいいかなって我慢してたから…。」
「うわー…微妙な貴族ぶりだなー…」
「えへへ。それじゃあお言葉に甘えていただきます。」

さっきの勢(いきお)いはどこえやら。
美味しそうに食いやがるから、微妙に気品がでてるぜ。
ほんと微妙に貴族。
微妙貴族だな、こいつは。

エリオットがサンドイッチを半分くらい食べてからジュートも食べようとカバンのなかなかを探っていた次の瞬間。

キッーーー。

甲高い列車の止まる音が響いた。

出会いは必然（後書き）

事件発生です？

１０／１６

名前を少し変更

不可抗力（前書き）

ちょっと腐的な要素が入っています。
お気をつけください。
いきなりです。

不可抗力

一定の間隔(かんかく)で保たれた速度が急に変われば誰だって体の自由を奪われる。

つまり、わざとではないのだ。

「「　？？　」」

列車が急停車した瞬間エリオットの体は席を離れジュートの体めがけて倒れた。
幸い、サンドイッチは潰れることはなかったが彼らの顔はぶつかってしまった。

俗にいうキスをしている状態であった。

「「　うっうぇぇ～？　」」

彼らは思わず悲鳴をあげ口許を抑えたりジュートにかぎっては窓から唾を吐いたりなど繰り返していた。

「エ、エリーちゃん。だ、大胆だな～。」

「あ、青ざめながらいっ、言っても説得力なっなないよ？」
「あ～、俺の唇は女の子だけのものだったのにー。」
「お、俺だって初めては女の子としたかっ……？」
「なになに？エリーのファーストキスは俺か？」
「うっうう…。むかつく…。」
「エリーちゃんかわいいー。」
「だから！エリーじゃない、エリオットだ？」
「はっはっはー。は～。まぁエリーがイケメンでよかったよ…。」
「なに？聞こえないよ？」
「なんでもねぇよ。」
「？」

さすがにデブ男とかクソオヤジだったら軽く死んでるわ、俺。
見た目って大事～。

ジュートは個室の扉にガタガタと手をかけたが開かなかった。

「開かない？」
「ああ。どうしたもんかな。」

俺、こういう乗り物系はあんまり好きじゃないから長い間乗ってられねーんだよな。
だから時間をロスするのはもってのほか。
列車が止まるってことは先頭の方でなんかあったのか？
……行ってみっか。

「なっ！何をやってるんだ？」
「あ？窓からでて上のぼって先頭まで行こうとしてる。」
「あっ危ないから？」
「動いてねぇーし…。よ…っと。」
「し、信じられない…。」
「エリー、お前もこいよ。面白いもんみれるかもだぞ。」
「えっ、えっ、いや、俺は…」
「…エリーは～実は～どう」
「行くから？行くから窓から絶叫しないでよ？」
「やりぃ～」

列車の中が混乱しているなか半ば無理やりジュートはエリオットを窓から連れ出し列車の上にのぼった。
黒塗りの鉄の塊が風にあたりとても冷えていた。
しばらくキョロキョロと辺りを見渡していたが前方から汽笛の鳴る音が聞こえてきた。
ジュートたちは急いで車両と車両の間に体をもぐり込ませた。

やっべ。
動きだしやがった。
まぁとりあえず速さに慣れてから進むとするか。
幸い、ここは2両目だしすぐ行けるだろ。
っと、エリーは大丈…？

「…エリー？」
「えっ、なに？」

「大丈夫か？」
「う、うん。ここまできたら開き直るよ！」
「うむ、結構なこった。」

気のせいか？
今、一瞬エリーがめちゃくちゃ鋭く威圧感ある目してた。
こんなイケメンでオドオド系の微妙貴族が…

「…今ものすごく失礼なこと考えなかった？」
「いえいえ。まさかまさか。」

エリオットは目の前にある車両の扉を開こうとした。

「ここもか？」
「うん、多分ディアラのせいだと思う。」
「わかるのか？」
「この扉は非常用としても使われるから鍵なんて元からついてないんだ。つけるとしたら外からしかつけられない。」

エリオットは扉を慎重に観察する。

「それによく見るとこの扉は古い小さなレールがひかれてる。少しくらいガタついてもおかしくないのにびくともしないんだ。」
「じゃあ何で窓は開いていたんだ？一度、列車まで止めて逃げてほ

しいのか閉じ込めたいのか何がしてーんだ。」
「今のところはそこまではわからないけど…ってどこ行くの？」
「あ？聞いてみりゃわかるだろ？そんなこと。」
「でも、もう列車はかなりのスピードで走ってるし風圧だって…」
「ま、見てなって。」

列車の上に再びのぼりジュートは深呼吸してから両手を前にかざした。
するとジュートの体から白い光の粒子が両手に集まりだした。
それはとても幻想的な光景でみるものがみれば神の御使いがおりなす神技にも見える。
整った顔立ちが真剣みをおび、つかの間の静寂が流れた。
水が滲むようにじわじわとジュートの両手から透明な氷のように透き通るガラスが広がった。
正確には頑丈な盾だろうか。
ジュートの体をしのぐ厚め長いガラス状で上から見ると三角形になっている。
ジュートはディアラを使い風圧を直撃しないよう盾で風を切ったのだ。
それを見てエリオットはかなり不覚という顔をした。

「しまった…王都に行くってことはつまりそういうことなのに。」
「なにブツブツ言ってんだ、行くぞー。」
「う、うん。今行く。」

彼らはジュートの作った盾を前に風をわけ列車の速度に体をあわせ前に進んで行った。

名前を呼んで

ジュートは揺れる列車の上を風圧さえなければといったように軽々と前に進む。
エリオットもよろつきはするもののしっかりジュートの後ろを歩く。

「エリー、もしかして結構やんちゃしてた？」
「君ほどじゃないよ。」
「いや～、それほどでも～」
「褒めてないから！」

だって、俺の貴族イメージは傲慢鬼畜身体能力皆無でぶっちょだぜ？
エリーちゃんは足どり的に一般貴族っぽくないから…。
あぁ、微妙貴族か。

「また失礼なこと考えたでしょう。」
「いえいえ、まさかまさか。おっ、エリー。こっから入れる！」
「……はぁー…」

エリオットは個室に入れたことをいまさらながら後悔しているのであった。

ジュートは運転車両の窓を上から頭をだして逆さまに覗いた。
この運転車両は他の車両に比べて大きさは半分以下だ。
そのため1両目とは言わず運転車両と言う。
その後に1両目、2両目と言うのだ。
つまりジュートたちがいた車両は実質上3両目ということだ。

「ん〜？なんか揉めてる？」
「揉めてる？人数は？」
「3人。あっ、なんかうねうねしてる。」
「う…うねうね？」
「あぁ。すげぇな、めちゃくちゃ動いてんぞ。あっ、捕まった。」
「捕まった？」
「なんかぐるぐる巻き。ん？女の子がいる。」
「女の子？食べられちゃうよ？」
「何の話しだよ。」
「えっ？だって食用植物…」
「んな訳ねぇーだろ。」
「君の説明がわかりにくいせいだよ。」
「だったら見た方が…」

ジュートが言いかけたときまた急に列車が止まりだし今度は後ろに進んだ。
エリオットの方は片膝を立て体を固定していたが、ジュートは反動で体を列車の上から投げだされた。

「ジュート？？」

エリオットはかなり大きな声で彼の名を叫んだ。
ジュートの手を掴み、間一髪のところで列車から落ちることはなかった。
そんな切羽詰まったエリオットにジュートは思いがけないことを口にした。

「お～、やっと名前呼んでくれたな。」
「そんなことはどうでもいいから！早く、手を？」
「よかねぇよ。呼ばねぇってことは俺を知りたくねぇってことだろ？知りたくねぇってことは自分を知ってほしくない、入り込むなだろうが。それとも俺が信用に値するか見極めてんのか？とりあえず、なに壁作ってんだよ。」
「な、なに言ってんだよ？別に作ってなんか…」
「…名前呼ばなきゃ助けられてやんない。」

エリオットは困惑した。
まだ知りあって数時間しかたってないのに見透かされたような言葉に…ジュートに…。
なぜこんなヤツにという言葉が頭の中を何度も通りすぎる。
ジュートの突発的な行動、思想にはエリオットは限界だった。

「～～～っ？早くしろ！ジュート？」

エリオットの差し出された手をジュートはしっかりと握り列車の側面に足をかけのぼった。

引き上げられたときにはお互い下を向き荒い息づかいをしていた。
するとエリオットは勢いよく顔をあげおもいっきりジュートを殴った。

「ーーーって～。」
「何か言うことは？」
「あ～…ちょっと怖かった？」
「ちょっと……？」
「あ、いや、かなり怖かったです。」
「それで？」
「助けてくれてありがとうございました。」
「それから？」
「心配かけてごめんなさい。」
「……はぁ～、むかつく。」
「あっ、でも名前呼んでくれたときは嬉しかったな～。それに知らん間にめちゃくちゃ砕けてるし。」
「調子に乗んな。」
「いてっ？殴ったとこに追い打ちビンタはいてーよ！エリーちゃん。」
「エリーじゃない、エリオットだ。クズが。」
「あれ？エリー。何かキャラ違くね？」
「…頼むからもう黙ってくれ……。」

ジュートたちは窓を蹴破り運転席に侵入した。
前方には運転スペースがあり後方には休憩室なのか扉がひとつと左側に出入り口がある。

「おぉー？これが運転車両、初めてみたぜ。」

ジュートが運転席ではしゃぐ中エリオットは出口の確保に向かった。
どうやらこの出入り口は使えるようだった。
エリオットがふと窓を見ると歪ながら丸みを帯びた窓枠が不自然に浮きでていた。
それはまるで粘土のようにちぎり取られたあとのように。

「だ、誰？」

ジュートが言ったように女の子がいた。
幼く警戒心剥きだしの声の子が休憩室から出てきた。
ツインテールの茶色の髪。
目は緑色のごく普通の薄い緑色のワンピースを着ている。
そして女の子の右手の中に黒く蠢(うごめ)くものがあった。
女の子は右手をジュートにかざしいきなりそれはムチのように早く細く伸びた。

「わっ！…っと。」

ジュートは体を捻りながらステップをとりそれを避けた。
それはジュートを捕えきれず窓を割った。

「なっ、なんでよけれるの？」

かなり焦り震えた声が逆走する列車に負けないくらいキーンと響いた。
彼女はかなり怯えていた。

「はっはっは！それは俺がかっこいいからさっ！」
「それ言っちゃかっこ悪いよ。」
「なんだと？じゃあお前ならなんて言うんだよ。」
「う～ん、よけようと思ったからよけた？」
「つまんねー…。」
「だから、面白さなんて求めてないから！」

ケラケラと笑うジュートに呆れながらも応戦してしまうエリオットに彼女は目をパチクリさせたが警戒心はとかなかった。
エリオットはひとつ咳をはらい彼女に問うた。

「俺はエリオット。こっちはジュート。君は？」
「……リシュ。」
「君のそれは鉄を自由に扱える力（ディアラ）なのかな？」
「そ…そう……。」
「君は何故こんなことを？」
「…わ、わた…し…。」
「なぁなぁ、エリー！これどうなってんだ？ちょっと触ってみてもいいか？」
「ジュート…。」
「……。」

運転車両にはしゃぐジュートにリシュは呆れた。
だが、リシュは空気を読まないジュートに救われた。
エリオットがリシュを鋭く威圧感ある目で見つめていたのだ。
それ程強い眼光というわけではない。
ただ、体を圧迫されているような息苦しさとこの人には嘘はついてはだめだという錯覚が働いた。
リシュは本能的に恐れ、言い竦んだ。

「なぁ、これリシュが動かしてんのか？てか操縦できんのか？」
「あ…ある程度……見て覚えたの。」
「マジか？すげぇな？俺もやりてー。」

ガタガタと振動する列車は今だ逆走を続けている。
割れた窓から風が入り込みジュートの髪をかき上げる。
無邪気にニカッと笑ながらどこか安心感のある声にリシュの心は揺れる。

「でも、どーせなら目的地に行きてーな。リシュ、よかったら列車を逆走させる理由教えてくれないか？」

その風はリシュの髪も大きく舞わせた。

名前を呼んで（後書き）

話の進みが遅い気がします……。

君は真面目だった

エリオットは怯えるリシュに話しかけるのをやめた。
優しく安心感のある話し方をするジュートの方がいいだろうと思い暫く黙って彼らの会話に耳を傾けていた。

「…弟が……。」
「うん？」

リシュはジュートにポツポツと話しだした。
話していくうちにほろほろと涙が流れた。

「弟は足と目が悪くて…列車が好きで…一度くらい触ってみたいって言ってて！でもジャラの村には停留所がなくて…」
「ジャラ？」
「唯一、森の中の村だよ。そこだけ線路が引かれてないんだ。」
「何で？」
「森の中だけあって自然を重んじる民なんだ。木を倒し、土をかきわけてまで線路を引こうとは思わないんだよ。近くは通っているけどね。」
「へぇ～。」

リシュは手を固く握り、泣きやもうと体を震わせた。

「3ヶ月前から力(ディアラ)を使って新しく秘密に線路を作って、運転士も縛りつけて、乗客までも巻き込んだわ。今さら引き返すつもりはないわ？弟が待ってるの！」

リシュは声を荒げ潤んだ目でジュート達を睨んだ。

「だから、私の邪魔するのなら許さない？」

リシュの固く握った手の中から蔓のようにシュルシュルと黒い鉄が伸びた。
生きているかの如く、くねくねと動くリシュの力(ディアラ)はジュート達を捕らえようとしている。

「運転もできる、線路作るってリシュはどんだけ天才なんだ？」
「はぐらかさないで！」
「はぐらかしてねーよ。弟のためにそこまで頑張ったんだろ？すげーじゃん。」
「ち、近寄らないで。」
「ジュート…。」
「大丈夫、大丈夫。」

ジュートはリシュにゆっくりと近づき目の高さをあわせた。

「けど弟はきっと素直に喜べないと思うぞ。」

「…私が沢山の人に迷惑をかけてる。けど！」
「ンなことどーでもいいんだよ。小さかれ、大きかれ誰だって他人に迷惑かけてんだろ。ンなことより大事なのはお前だろ。」
「わ、私？」
「弟のために動いてお前がすり減ってちゃ弟が泣くぞ？お前が傷ついてちゃ意味ねぇーだろ。」

何故だかその言葉はエリオットの中にも深く滲む、心地の良い優しい言葉だった。
ジュートの言葉の魔法にかかったリシュは再び涙を流した。

「いや？私は弟には笑て欲しい！ずっと、ずっと？」
「だったらやり方を変えなきゃな。リシュがこんな風に泣かなくていい方法。」
「でも…どうやって…。」
「頼みゃーいいんだよ。運転士の人に『おねがぁ～い、お・じ・さ・ま？』って。」
「……。」
「ジュート、引いてる。」
「た、例えだ、例え！要は誰かに助けを求めたっていいじゃないか。ビバ・巻き込み人生？」
「巻き込まれた方はとんだ災難だけどね。」
「うっ？けど、選んだのは結局自分だ。だろ？」
「…そうだね。」
「だから、大丈夫だ。このエリーちゃんでさえ落ちたんだ。リシュのクルクルお目々があれば瞬殺だ？」
「う、うん。がんばる！」
「おい…。」

テンションが上がりきった二人にエリオットは小さくつっこんだ。
そのときガタリと音を立て休憩室の扉が開いた。
一人の運転士だと思われる男が頭を押さえながら出てきた。
予想だにしなかったことにリシュは激しく動揺した。

「あ…あ、ひっ…あーーー」

リシュは混乱し運転士を見た瞬間青ざめた。
これだけの大事（おおごと）を起こしたリシュに正直に自首するのは１０歳にも満たない子どもには荷が重いだろう。
そのリシュの心に力（ディアラ）が反応し両手の中の黒い塊が蠢いた。
リシュの体から仄かに緑色のような淡い光の粒を出しながら蠢く鉄の塊を蔓のようにシュルシュルと伸ばすと今度は捕まえるではなく、突くように襲いかかってきた。
それは殺さんばかりの速度だった。
２本の黒い蔓が剣で刺すように運転士の男に襲いかかってきた。
男が悲鳴を上げる前にエリオットが男を左手の出入口と反対の方向へ突き飛ばし、エリオットは絶妙なタイミングで蔓を避けながら伸縮できないように掴んだ。
一瞬、エリオットの顔の近くでヒュッと空を刺す音が聞こえたがそんなこと構いもせず伸びた蔓を捕らえる。
魚のように跳ね踊る蔓は元が鉄であるためエリオットの両手を容赦なく傷つけた。
一方、ジュートの方は一度エリオットの方を見て顔を歪め、休憩室

の方を見て後ろを向いているリシュを後ろから抱きしめた。
優しい手つきで頭をなぜながら。

「どした〜？リシュ。持てるスキル全開でお願いするんじゃなかったのか〜？」
「ーーーあ、あ…。お、お兄ちゃん…。わた、私…。」
「うん？」

暴走したリシュにジュートは懸命に呼びかけた。
大丈夫、大丈夫だと何度も頭をなぜ、リシュは意識を取り戻した。
目が覚めたリシュは一度ジュートにまわされた逞しい腕をギュッと握り、深呼吸をした。
同時にエリオットの掴んでいた鉄の蔓は力なくしなれていった。

「あの、運転士さん。こんなことして本当にごめんなさい。迷惑かけてごめんなさい！でも、でも、あの！お願いします！あっ、じゃなくて、えっと…お、おねがぁ〜い、お・じ・さ・ま？」
「しょ、しょうがないな〜？」
「「……マジかよ。」」

リシュはいたって真面目であった。

それから職員の迅速な対処によりリシュが行ったことは『武装集団が襲ってきたときの予行練習体験』として乗客に知らせた。
最初こそ不満をあらわにしていたが
『お客様方は大変貴重な体験をなされました。列車が後方に進むというのは今日限りのたった一度なのですから。この列車に乗っている者だけなのですよ。どうぞご家族、知人にご自慢なさってください。』
とでも言えば拍手喝采の声だ。
これをエリオットと運転士達が１０分程度で決めた。
ジュートは改めてエリオットの凄さを知った。
リシュは列車の全ての窓と扉を固定していた鉄の撤去に力をさすがに使いすぎりぐったりとしながらもジュート達に謝罪とお礼を述べた。
弟に列車を触らせる夢は運転士と相談して
『運転車両なら乗れるのでは？』
という事になり骨抜きにされた運転士の理解ある一言にリシュはまた涙を流しお礼を述べた。
見た目おじいちゃんなこの運転士は孫と疎遠でなとジュートにグチっていた。
それから約1時間ほどでシェルダスに着いた。
その間ジュートとエリオットは
『死ぬ……。酔った。助けてぇーエリ～～～。けど巻く～。』
『自分でできるんだけど…。』
などとすっかり潰れながらエリオットが怪我をした患部を消毒してしっかりと手当てをしていた。
実はかなり心配していたのは言うまでもない。

「ほら、早く行きなよ。シェルダスに着いたよ？」

「ううっ…エリ～～～。」
「はぁ～。出入口までだよ？」
「おぉ～、愛しのエリー！ありが、ぐぇっ？」
「はぁ～。重いなぁ～。」
「く、首んとこ引っ張んないで！出ちゃう？てかっ俺の扱いどんどんぞんざいになってるよ？」
「ジュートが砕けた方がいいって言ったんだろう？」
「親しき中にも礼儀ありだろ！なぁ、そうだろ？エリー！」
「わー、親しくはないけど君にぴったりの言葉だね。」

足早にジュートの首ねっこを指で掴みながら列車の外に放おった。

「くっ！さよならなんて言わないぜ？」
「ふふっ…そうだね。じゃあ、またねかな？」
「わ、分かってるじゃねーか。エリーのくせに。」
「エリーじゃない、エリオットだってば。」
「いひゃい、いひゃい。ほっへはふはふはー。（痛い、痛い。ほっぺたつまむなー。）」

汽笛が鳴り、出発の準備が整った。
ジュートは頬をさすり元気よくエリオットに告げた。

「じゃあ、またな！いつかまた会おうぜ？」
「会えるよ。不本意なことに。」
「あ？」

列車は動きだし次の停留所まで走っていく。

「きっと、すぐだよ。」

列車の姿が見えなくなって音さえ聞こえなくなっても宙に浮かぶ黒い煙はまだ残っていた。
それはまるで指を浸せばどこまでも広がる水面ように広がり雲に交わっていく。

君は真面目だった（後書き）

とりあえずここまでが序章のような1章。
次から王都行きます！
学園です！

キレイ系よりかわいい系のが好み

「シェルダスでけぇ…門からでけぇー…。」

目の前にある赤い門は本当に大きく、そこに群がる人もまた多くざわめきが広がっている。

そんでどーやって中にはいるんだっけ？
村に門とかねーから分かんねぇ。
なんか警備らしきやつが立ってるけど。
えーと、確か手紙に書いてあった…か…？

ジュートはごそごそとカバンの中を探り手紙を出した。
ジュートがふむふむ、だめだ。なんだよ、紅玉の門って。と折れ曲がった手紙をひらひらとさせていると周りが突然静かになった。

「あ？なんだ？」

キョロキョロと周りを見渡せば視線はみなジュート一直線。
ヒソヒソと話す者もいてますます意味がわからない。

「誰でも知る国からの手紙、ましてや王直々の手紙を見れば誰だっ

てあなたをただ者じゃないと思います。」
「あ？手紙？」

振り返ると綺麗な赤髪をツインテールにした薄い黄緑色の瞳の女性がいた。
シュッとした紺色のワンピースを着ている。
物腰がとても優雅で礼儀正しい姿は大人の威厳が見られる。

「…もしや入場の仕方をご存知ないのでしょうか？」
「あぁ。俺、ここ来たの始めてでさ。着いたら役場！じゃねェからびっくり。」
「それでしたら、私（わたくし）がシェルダスをご案内致たしましょうか？」
「ハハッ！なんかナンパみてェ。けどそこまでする必要はねェよ？」
「いいえ、ナンパではありません。私の仕事はディチャーでございます。」
「ディチャー？」
「ディチャーとはディアラマスターになられる方々に基本的な知識を教える者です。簡単に言いますと学校の先生でございます。ジュート・ローガ様。」

宛先…読まれた。
目ぇいいな、この人。
綺麗だし、害はねェことは分かったけどさ…
国王直々って…俺のディアラ全然大したこと無いんだけど様づけされていいわけ？

「私、ナンシー・キャボットと申します。以後お見知りおきを。」
「ジュートでいいよ、こっちこそよろしくな。ナンシー先生。」
「ではジュート様と。それでは役場に行く前にこちらにどうぞ。」

様はいらねェのになぁと思いながらナンシーに連れられ向かったのは目の前にある大きな門ではなく、その隣りのいかにも貴人が通るような門だった。
赤を基調としており煌びやかに装飾品がついている。

紅玉の門か？
けど、そうだとしたら…

「あの～、ナンシー先生？俺見ての通りド平民中のドッ平民ですけど？イケメン街道に進むんなら問題ないけど。」
「どちらも関係ありません。ジュート様はここを通るに値する偉大な功績ディアラをお持ちであります。お手数ですが台に先ほどの手紙を提示し、こちらの認証紙を口に挟みディアラの発動をお願いします。」

言われるがままに手紙を台の上に置くと下から青い光が当てられた。
しばらくするとじわじわと青白く国の国章、狼の紋が浮き出た。
びっくりして見ているとナンシーが白い正方形の和紙をジュートに渡した。
なんの変哲もない紙だ。
これを半分に折り口に挟みながらディアラを使う。
するとみるみる薄紅色に染まっていった。

「おぉ～。お～～～。」
「これでセキュリティチェックは終了しました。」
「マジで？こんだけ？」
「はい。我が国誇るセキュリティシステムでございます。第一に、手紙が本物かどうかを。第二に、先ほどの白い紙、認証紙を口に含み唾液と肉を。第三に、本当にディアラを扱えることができるかを全て記録しチェックすることによってあなたがジュート様本人であるか判定するのです。次に入場するときはより簡単に入ることができます。お疲れ様でした。」

「へぇ～。なんか近代化中？」
「それは常に意識しております。例えば、旧時代の指紋認証は安全性の問題より廃止されております。」
「なんで？指紋なんてひとりひとり違うだろ。」
「違法ルートで指紋シールと言うのが発売されていたことがあるのです。銀行は指紋認証であったため数名の方が被害にあい多大な損害を受けました。」
「つまり俺の常識は旧時代のものだと…」
「そちらのほうは問題ありません。これから学校で学ぶべきことでございます。ご安心ください。」
「学ぶねェ～？」

あ、頭の悪さがばれてしまう…

まっすぐした道の脇に店が並ぶ。
人が多いのはもちろんのこと衣類、雑貨、食品など様々な店が並びとてもにぎわっていた。
そこは旧時代と変わらないらしい。
しかし、よく見ると衣類はふわふわと浮き客が手を伸ばせば服はその手に収まった。
雑貨屋に入る客は多い。
だが入った瞬間、客の姿が消えた。
果樹などの食品は全て半透明の膜で包まれもぎたての新鮮さがある。
き、近代化？

「衣類は洋服かけ削減としわの防止、手を向ければセンサーに反応し服は寄ってきます。ここ雑貨屋は常に人が多くにぎわいます。人口制限をしないよう互いの認識をずらすことで店内を広々と見回ることができます。そして新鮮さを保つため水の膜で常におおいヨゴレ、キズから守ることができるのです。」
「なんもいってねェのに…すげェ～。」
「プロですから。」

そんな風にゆっくりと見歩けば右側の方に茶色の屋根が見えナンシーがそこが役場だと教えてくれた。

やっとかぁー。
列車の中はすげェ疲れたからな。
まぁ、すぐ突っ込む俺も悪いけど気になるしぃ。

一種の突っ込み体質だ。
きっと？
ま、さっさと手続きして休みたいいぜ。

っと思った矢先、

「「こっっいつは、俺のものだぁぁぁーーー？？」」

早くも突っ込み体質発動か？

男にはやらねばならぬときがある

大きな声がした方を見るとそこには制服を着た2人の男学生がいがみあっていた。
一人は黒いシャツに赤いネクタイ、黒いスラックス、白い上着に金の装飾がされている制服をきっちりと着ている。
雪のように白い肌、黄金に輝く金の髪、海底まで見えそうな透きとおるような碧い瞳でもう一人の男を睨んでいた。
それはまるで何処かの国の王子様。
もう一人も同じような作りの白いシャツに赤いネクタイ、黒いスラックス、黒い上着に金の装飾がされている制服を着崩して着ている。
太陽に愛された肌、緑を帯びた黒い髪、怒りの炎を宿した真紅の瞳で白い制服の男を睨んでいる。
これまた違ったタイプの王子様のようだ。

睨みあったまま黒い制服の男が口を開いた。

「クリス・ウォルステンホルム！てめェ？性懲りもなくまた俺のもんを！」
「レイド・ヴォーン！この店で売っているものは君のものじゃないって何度言ったら分かるんだ！」

どうやら白い制服の方をクリス・ウォルステンホルム。
黒い制服の方をレイド・ヴォーンというらしい。
彼らはとある店の前で言い争っている。

そこの主人は困ったよう苦笑いしているところからよくあることなのだと推測できる。

「いくらネクタイが赤いからといっても所詮、低俗な黒服(庶民)だ。常識も知らなければ礼儀もないな！」

「ハッ！この店は庶民御用達だぜ？てめーはその常識も礼儀もねェ店からこいつを買うのかよっ。白服(貴族)様、どうぞゲスな庶民の広場から立ち退きあなた(ママ)様専用の職人にでも作ってもらって下さいな！」

レイドは右腕を広げ左腕を胸に。左足下げ、礼の姿勢はとったが顔を上げニヤリと口角をあげ瞳をギラつかせた。
それを見たクリスは下を向き顔を隠しながら怒りに顔を歪めた。

こりゃあ、レイドって奴の方が一枚上手だなぁー。
にしてもさぁ～…

「……ない……許さない…絶対許さない！貴様など庶民にも劣る？俺が叩きのめす？？」
「ハッ！いきがんなよっ。マザコンが！」

この店ってどう見ても…

「「レモンチーズタルトは俺のものだぁ？？」」

なんで男2人でケーキ屋の前で言い争ってんだ…。
シュールすぎる……。

「ホルズ？」

ジュートが唖然としてる間にクリスが叫ぶ。
クリスの足に碧い光が、

「ブライブ？」

そう叫んだレイドの拳に紅い光がまとわり付いた。

クリスは瞬時にレイドとの間を一気につめた。
勢いをつけ高いジャンプをし重力の力を借り上から蹴り下げた。

速い！
しかもあのケリはケンカってレベルじゃねェ。
骨がいっちまうぞ？
くそっ！
駆け出したくても前にいるギャラリーのせいで間に合わねェ！
なんで誰も止めねェんだよ？

ジュートの必死さ虚しくドゴォッと嫌な音がした。
しかしレイドはそれを左腕受け止めた。
眉ひとつ動かさず容易だと言わんばかりに。
そして右手の拳でクリスの腹を思いっきり殴りつけようとしたがレイドの左腕を足場とし、クリスは蹴りつけた足に力をいれ拳が当たる前に宙に飛び避けた。

「すっげ。これは…ディアラか…」
「その通りです、お二方は肉体強化のディアラであります。ウォルステンホルム様は『脚が駿足になるディアラ』ヴォーン様は『腕が剛腕になるディアラ』をお持ちであります。あぁジュート様、彼らより前へ出ないで下さい。危ないです。」
「彼らって…」

住民を押し退け最前列にやって来たジュートの目の前には腕輪を付け右手を2人にかざす男がいる。
よく見ると2人を中心に四方に同じような腕輪を付けた男達がいた。
そして何か膜のようなものが闘う2人を閉じ込めているのが分かった。
半径１０ｍくらいだろうか。
この円の中に入る人は誰もいないが、円の周りで歓声を上げたりするなど楽しんでいるように見えた。

「結界ってやつ？けどあの人たちもディアラ使えんなら止めにはいんねェ？普通。」
「結界は最低４人一組でディアラの操作を行うものです。しかし、あの４人の方はディアラを使っているわけではありません。詳しい

話は役場までの道のりで。参りましょう、ジュート様。」
「えっ、止めなくていいのかよ？」
「これは一種の見世物なので放っておいても害はありません。さぁ、ジュート様。」
「おお？ナンシーセンセ、なんか積極的？」

ナンシーはジュートの手を引き急かすように群がる人を掻き分け出て行こうとした。

が、

「「あっ、ナンシー先生？」」

クリスとレイドはナンシーに気ずき交わす脚と拳をひっこめ満面の笑みでナンシーの名を呼んだ。
戦意を喪失した2人を閉じ込めていた結界が消え住民たちもばらばらと去って行く。

「こんにちは。ウォルステンホルム様、ヴォーン様。」
「「こ、こんにちは！ナンシー先生？」」
「お買い物ですか？」
「はい。火曜日だけ２０ピース限定のレモンチーズタルトを買いに来たんです。僕の大好物で。よかったら先生が如何ですか？」
「それは同意見だな。俺も頻発に喰ってるんで、先生に喰われた方がタルトが喜ぶと思います。」

頬を少し染めた2人はナンシーに先ほどとはうってかわり礼儀正しく接する。

「いえ。私は仕事の最中ですので…申し訳ありません。」
「この方の案内ですか？」
「えぇ。ジュート・ローガ様です。ジュート様、こちらクリス・ウォルステンホルム様、レイド・ヴォーン様です。お二人ともディアラの訓練校、スウェルで学んでいられます。」
「「…ジュート……様？」」
「あ、あぁ。ジュートでイイよ。よろしくな。」

な、なんだろ…
目線が痛いような…

「お二人とも申し訳ありませんがこれにて失礼します。ジュート様参りましょう。」
「あ？あー、行く行く。ごめんナンシーさん。」
「「…ナンシー…さん…？」」
「あっ、わりぃ。俺心ん中じゃナンシーさんって呼んでてさ。」
「お好きなように呼んで頂いて構いません。むしろそちらの方が親しみがこもっていて良いかもしれません。」
「でもさ～、一応先生だろ？そーゆーのって大事なんじゃねーの？」
「私はディチャーです。あなた方のためにいる者です。それに歳もそれほど変わらないと思います。」
「え？マジ？いくつ？」

「２１です。」
「わっ、ほんとだ。あんまわかんねェな！」
「はい。あぁ、それと先ほどの話のあの腕輪をした４人ですが……
……」

ジュートとナンシーは歩きながら楽しそうに役場に向かった。

「…なんだ。あれは…」
「…俺が知るわけねェだろ。」
「なんでナンシー先生とあんなに親しげなんだよ？」
「知らねェーって言ってんだろ？もう一発殴られてーのか？あぁ？」
「その前に俺が蹴り飛ばすに決まってる？」

２人の不毛な闘いは続くのであった。

男にはやらねばならぬときがある（後書き）

タルト…どうなったのさ…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7244w/

ディアラマスター

2011年11月17日18時10分発行